

神戸大学 大学教育推進機構 大学教育研究

第 15 号 (2006 年度) 2006 年 9 月 30 日発行 : 37-47

## 若者にとってキャリアとは何か (その 1)

山内 乾史

# 若者にとってキャリアとは何か（その1）

山内乾史（神戸大学大学教育推進機構助教授）

## 0．現代の若者は変わったのか

近年、若者バッシングが激しい。無理もない。例えば「ニート」について報道番組が組まれた場合に、必ずといってもいいほど、平日の昼間から公園でスケートボードに興じる、茶髪・ピアスの若者が登場し、「なぜ働かないのか」と問われると、「え～、だって働くのってウザいし・・・」といった言葉を返してくる。そこに込められたメッセージは、どうしようもない若者たちということであり、彼ら／彼女らが現在の境遇にあるのは、社会の問題ではなく、個人的な意識の問題だというわけだ。

しかし、そうなのだろうか。例えば本田由紀他『ニートって言うな！』（光文社、2006年）において本田は、ニートという概念が登場してくることによって、本来若者の就労に関して社会的取り組みが必要で、しかもその気運が高まってきたにもかかわらず、個人的な原因 例えば、甘え のせいにされ、社会的取り組みの流れに水をかけたと指摘する。

筆者も認識をほぼ共有する。上述の本田他(2006)は現在の様々な社会的言説を分析したものであり、筆者がそれを繰り返す必要はないだろう。

筆者は何を言いたいのか？ 結局のところ、若者に対する温かい目線が急速に失われているということである。その根本には若者に対する歪んだイメージを受け付ける無意識なあるいは意図的なメッセージの発信があろう。しかし、筆者の考えるところ、若者を大事にしない社会には未来はない。若者を甘やかすというのではない。ただ、同じ社会でコミュニティで生きていく同胞として、彼ら／彼女らを「育てていこう」あるいはともに「成長しよう」という気もなく、ただ「どうしようもない奴らだ」と蔑む目線からは、何も建設的な提言は生まれない。同胞を見下し、蔑む、弱者に対して、自己責任を強調し、社会のせいにするな、甘えるなど声高に叫ぶ。これは社会なのか？ 社会とはただ砂粒のように人が集まっているだけの場所なのか？ こういったことにつける。そこで、フリーター、ニート、ワーキング・プアを中心とする近年の若者論を概観し、それらと近年のキャリア教育がどのような関係にあるのかを論じたい。今回はとりあえず、ニートと低賃金の若年労働者についての先行研究の大まかなレビューと概念整理のみに終わることをお許しいただきたい。

## 1. ニートとは何か？

まず、ここで、近年さほど論じられなくなってきたが、一頃よく議論されたニートについて分析してみよう。ニートという言葉は、もともとイギリスから来ている。1990年代末からイギリスでは16～18歳人口の9%にあたる16.1万人が教育にも雇用にも職業訓練にも身を置いていないことが明らかになっている。彼らは NEET (Not in Education, Employment, or Training) と呼ばれるようになる。(原(2006)より)。1997年にブレア政権が発足し、同年に社会的排除(social exclusion)防止局がスタートする。1999年に同局が *"Bridging the Gap"* と題するレポートを提出したが、このレポート内で初めて NEET という言葉が登場し定義されている。

1997年に発足したブレア政権は福祉国家時代の福祉依存体質からの脱却を訴えた。巷間よく言われる「私はホームレスには金を恵まない」というブレア首相の言葉は、自立を促し、自助努力をする人には支援する、という基本姿勢の端的な表現である。もちろん、その代わりにいわゆる「福祉」は削減し、財政の効率化を高めることをねらっているわけである。しかし、この政策を実行ある者にするには、雇用へのアクセスの改善と動機付けが必要であり、職業訓練が重視されるようになる。しかし、雇用の改善だけではなく教育の改善も、あわせてうたわれるのである。つまり、従来のような新古典派の主張する完全雇用モデルをめざすのではなく、雇用可能性(employability)を高める必要があるというわけである。

この視点からは NEET は若者であるにもかかわらず福祉の対象になり、膨大な社会的コストが発生することになるし、さらに、社会的排除との関連も指摘されるようになり、彼ら／彼女らの反社会的行動、非社会的行動も問題視されるわけである。

## 2. 日本のニートについての議論

しかし、上述の議論はあくまでもイギリスの議論であり、日本のニート問題には良くも悪くも独自性がある。

ニートという言葉は、玄田・曲沼(2004)以降、広く社会的認知を得たと言える。20世紀後半の日本で広く見られた学校から職業へのスムーズな移行が 21世紀に入る前後から崩壊し始め、フリーター問題が発生したのと同様のもと考えられる。小杉(2005)によればフリーター＝フリー・アルバイトは 1980年代末にアルバイト情報誌が作った言葉であり、「念頭に置いていたのは、何らかの目標を実現するため、あるいは組織に縛られない生き方を望んで、あえて正社員ではなくアルバイトを選ぶ若者」だった。ところが、1990年代の景気後退後に激増したのは「やむを得ず」型「モラ

トリアム型」等のタイプが増加した。(小杉、同書)山田昌弘の「パラサイト・シングル」論(1999)が登場するのも、この時期である。しかし、今日語られるニートの意味は「パラサイト・シングル」とは異なり、豊かな中産階級の甘えたおぼっちゃま、お嬢ちゃまというイメージではなく、悲壮感の漂う者ともなっている。また、ニートは求職活動を展開しない無業の若者を指す言葉ともなっている。求職活動を展開しない以上は、公的支援の対象外となってしまうのであり、それは自己責任論の前では、「どうしようもない若者」という議論となり、切り捨てる対象になってしまうのである。いずれにせよ、イギリスのような階級的・民族的視点は欠落しているといえるのである。

### 3. 日本のニートの諸類型

ニートとひとくくりにしてもその内実は多様で、様々な類型がある。

例えば、和田秀樹(2005)は 責任を取りたくない症候群型、社会的ひきこもり型、パラサイトシングル型、希望格差社会型、家族社会崩壊型に分けている。浅井宏純(2005)は 逃避型、もがき型、新型=学校依存型にわけ、をさらに、ヤンキー型とひきこもり型に、をさらにつまずき型と立ちすくみ型に分けている。また二神能基(2005)は 情報力必要型、社会力必要型、人間力必要型に分類する。いずれにせよ、「ニート・ひきこもり問題」とひとくくりにして論じられるきらいがあるニートだが、ひきこもりはその一類型に過ぎず、同一視はできない。

ニートに対しては、様々な視点からの問題提起と取り組みがある。岡崎智氏(2005)(浅井・森本編所収)によれば、下記の通りである。

- ・ハローワーク、ヤングハローワーク、総合労働相談コーナー
- ・ジョブカフェ、ヤングジョブスポット、ジョブジョブワールド
- ・若者自立挑戦プランによるキャリア教育
- ・トライアル雇用、日本版デュアルシステム、草の根eラーニング
- ・若者自立塾、ジョブ・パスポート、職業訓練券
- ・NPO や民間企業による就労支援

しかし、ニートという概念については、現在も本田他(2006)を始め、鋭い批判があり、なお、論争的である。最も大きな争点は、ニートという概念が、いかなる新たな有効な労働政策・教育政策の打ち出しに貢献したのか、という点にある。この点については、次回以降、詳細に述べたい。

#### 4. 「使い捨てられる若者たち」に関する比較社会学

さて、次に筆者と原清治氏（佛教大学）、小川啓一氏（神戸大学）、深堀聡子氏（京都女子大学短期大学部）、植田みどり氏（国立教育政策研究所）の5名が共同で取り組み始めた『使い捨てられる若者たち』に関する比較社会学』について現在の研究の方向性について報告しておきたい。なお、本報告は2006年度日本教育社会学会第58回大会において、原と山内が共同で行ったもののうち、山内の担当部分である。原の担当部分は、山内乾史編『教育開発と教育協力の社会学』（ミネルヴァ書房、2006年）に収録されている。

先進諸国において近年若者を中心とする就労形態および彼ら／彼女らのメンタリティが非常に大きな関心を呼んでいる。私たちの関心する範囲でもイギリス、イタリア、アメリカ、日本でこれらの書籍が非常に大きな反響を呼んでいる。そこに描かれているのは、国によって差はあるが、あまり良くない労働環境において、概ね低賃金で、しかもあまりキャリア展開の展望をもてそうにない職務に就いている若者を中心とする群像である。

ただ、われわれが問題にしたいのは、こういったスチュアート・タノックの邦訳の題にいう「使い捨てられる若者たち」がどのような層から、どのような経緯で発生してくるのかについて、欧米のケースと日本のケースとでは大きな違いがあるように考えるからである。本研究の目的は、これらの諸点に関する日本のケースの特質を、主として英米両国と比較して明らかにしていくことにある。今回の報告は、パイロット調査の結果を中心としたものえしかない。英米については、これから実地調査を行うため、ここでの報告は文献レビューにとどまる。また日本については現在本格的にインタビューと質問紙調査を行っているところであり、次年度以降、本誌で報告する。

さて、まずイギリスについてである。NEETをめぐる議論でよく紹介されるが、「使い捨てられる若者たち」の背景には社会的排除（ソーシャル・イクスクルージョン）の問題がある。NEET（アルファベットのニートですが）の比率を、地域別にみても、南北差が大きく、スコットランド内でもハイランドとローランドの間で差がある。

すでに述べたポリ・トインビーの『ハードワーク』においては、最低賃金が実質価格において大きく低下していることが繰り返し指摘されている。いわゆるワーキング・プアと呼ばれる人々の賃金はほとんど上昇しておらず、しかも最低賃金の下落傾向が続いているわけである。

そこで、今述べたポリ・トインビーの『ハードワーク』についてであるが、イギリスの労働党よりのクオリティ・ペーパー『ガーディアン』の女性記者が「英国国教

会」の『貧困と闘う協会活動』の「40日間最低賃金（時給£4.1=820円）でクラス体験をしてみませんか」という提案を受け、低賃金労働者の暮らしを体験したレポートである。一部にはセレブなご婦人がマリー・アントワネットもどきの「ごっこ遊び」をただけという批判もあるが、かなり秀抜なレポートと私は評価する。サッチャー政権下で進んだ新自由主義的政策の結果、イギリスでは階層間格差が広がり、低賃金労働者の家庭の子どもは、結局社会的に上昇することができず、親と同じ道を辿っているという現実が紹介されているこういった人々には、南アジア系移民、カリブ海諸島系移民の特に女性、若者が多く見られるということである。

次にイタリアについてである。2006年8月6日付の『朝日新聞（朝刊）』で紹介されたように、『ジェネラチオーネ・ミッレ・エウロ（1000ユーロ世代）』がイタリア国内で大きな反響を呼んでいる。私も共同研究者もイタリア語をよく解さないけれども、把握した範囲で述べると、これはクラウディオという27歳の通信会社の会社員を主人公にした小説である。ばりばりハードな仕事をこなし働く、しかし低賃金、というわけである。イタリアでは1990年代始めから終身雇用から短期雇用に切り替え始めた。さらに、2003年に改正された労働法で、派遣労働が認められた。また若年無業者が増加した。

周知の通り、イタリアでは、日本同様にコネ採用の慣習があり、親類や有力者からの推薦がない若者は就業することが困難になっている。不平等を測定するジニ係数をもてもアメリカが高いのは当然予想できるところであるが、イタリアはそれに近いところまで来ている。また、イタリアでは18～30歳の訳8割が「経済的に独立が困難」なため親と同居しているという状況もある。

さて、最後にアメリカについてであるが、元々離転職が日本よりも盛んではあるが、若年者の転職回数が多いこと、高校中退や人種のマイノリティであるほど雇用状態が悪化することが、しばしば指摘されている。先述の『ニッケル・アンド・ダイヤモンド』によれば、1973年の賃金レベルと比較した場合、賃金上昇率が最も低いのは全労働者の中で最も貧しい層であり、賃金格差が急速に拡大しているということである。

われわれはアメリカ本土とは別にハワイ州に注目している。周知の通り、ハワイは全人口の17%が移民であるが、貧困率が1990年代に急速に増えている。収入の増加率においては地域間格差が目立っており、若年無業者の増加にも影響を与えている。

ハワイ州はアメリカ全体と比べて失業率はかなり低いが、平均収入は逆に低くなっている。本研究全体とも関連することであるが、失業率の低下、すなわち完全雇用が問題の解決ではないということである。正規雇用であっても生活できるほどの収入を

得ていないため、多くの若者がアルバイトも同時に行き、その日暮らしを行き、一生低賃金労働に從事することになるわけである。しばしば指摘されるように、完全雇用がめざされるべきなのではなく、雇用可能性を高めることがめざされるべきなのである。

先ほど述べたバーバラ・エーレンライクの『ニッケル・アンド・ダイムド』であるが、彼女もポーリー・トインビー同様、低賃金労働に從事し、ルポルターージュを書き上げた。彼女も、いわゆるワーキング・プアに女性、民族的マイノリティが多くいることを強調しております。「頑張れば報われる」「成果に応じて果実にありつける」という美辞麗句に飾られた新自由主義、競争主義的な政策は、実は就労して働いても働いても貧困から抜け出す見込みの全くない人々を大量生産しているわけであるが、そういった低賃金労働に長く從事しているうちに、メンタリティまでも蝕まれてしまうところが本書の重要な指摘であると考えます。実際に、本書によれば最低生活を営むための「生活賃金」を稼げない人が全労働人口の6割以上となっているということである。なお、先ほどのポーリー・トインビーも、バーバラ・エーレンライクも自身は若年労働者ではありませんが、彼女らのレポートの中心は若年労働者が占めていることを一言断っておく。

なお、『使い捨てられる若者たち』の著者、スチュアート・タノックは、もう一つ年齢差別ということを指摘している。つまり年配者の雇用を守るために、ワーキング・プア化した若者が増えているということである。われわれが若年者に中心をおいて研究を進めたいと考える根拠はここにある。

以上、あまりにも駆け足で見えてきたわけではあるが、欧米諸国に見られる若年無業者の多くは、エスニック・マイノリティ、女性、低所得層出身者、高校中退者などであり、彼ら／彼女らがソーシャル・イクスクルージョン＝社会的排除の対象になっているということを先行研究は示している。もちろん、この「常識」自体吟味されねばならないだろう。しかし、この「常識」に基づき諸国はソーシャル・インクルージョン＝社会的包含をめざして、諸施策を打ち出そうとしているわけである。今概観してきた諸著作から言えることは彼ら／彼女らの労働環境が30年以上前からあまり改善されてはないということである。

いうならば、不平等の悪循環が若年無業者・低賃金労働者を生み出しているわけである。

(続)

## 引用・参考文献

- \* 上里一郎監修・白井利明編『迷走する若者のアイデンティティ フリーター、パラサイト・シングル、ニート、ひきこもり』ゆまに書房
- \* 明石要一(2006)『キャリア教育がなぜ必要か フリーター・ニート問題解決への手がかり』明治図書
- \* 荒木創造(2005)『ニートの心理学 「激化」したアダルトチルドレンにどう対処するのか』小学館
- \* 朝日新聞経済部(2006)『不安大国ニッポン 格差社会の現場から』朝日新聞社
- \* 浅井宏純・森本和子(2005)『自分の子どもをニートにさせない方法 ニートといわれる人々』宝島社
- \* 文春新書編集部編(2006)『論争 格差社会』文藝春秋
- \* (社)部落解放・人権研究所編『排除される若者たち フリーターと若者たち』解放出版社
- \* 玄田有史・曲沼美恵(2004)『ニート フリーターでも失業者でもなく』幻冬社
- \* 玄田有史・小杉礼子・労働政策研究・研修機構『子どもがニートになったなら』NHK出版
- \* 玄田有史編(2006)『希望学』中央公論新社
- \* 原清治(2006)『フリーター、ニート問題と日本の教育計画』山内乾史・杉本均編『現代アジアの教育計画(下巻)』学文社
- \* 畠中雅子(2005)『教育貧民 減収増税時代でも減らない「教育費」事情』宝島社
- \* 速水敏彦(2006)『他人を見下す若者たち』講談社
- \* 本田由紀(2005)『若者と仕事 「学校経由の就職」を超えて』東京大学出版会
- \* 本田由紀(2005)『多元化する「能力」と日本社会 ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版
- \* 本田由紀・内藤朝雄・後藤和智(2006)『「ニート」って言うな!』光文社
- \* 本田昭光・白井邦彦・松尾孝一・加藤光一・石畑良太郎(2006)『階層化する労働と生活』日本経済評論社
- \* 二神能基(2005)『希望のニート 現場からのメッセージ』東洋経済新報社
- \* 不登校情報センター編(2005)『最新版 不登校・引きこもり・ニート支援団体ガイド』子どもの未来社
- \* 居神浩・三宅義和・遠藤竜馬・松本恵美・中山一郎・畑秀和(2005)『大卒フリーター問題を考える』ミネルヴァ書房



- \* 糸山秋子(2005) 『ニート』 角川書店
- \* 岩瀬彰(2006) 『「月給百円」サラリーマン』 講談社
- \* 人生戦略会議(2006) 『ニート・フリーター革命 30歳へのスピード戦略 下流スパイラル脱出ミッション』 WAVE 出版
- \* 城繁幸(2006) 『若者はなぜ3年で辞めるのか? 年功序列が奪う日本の未来』 光文社
- \* 加藤諦三(2006) 『格差病社会』 大和書房
- \* 喜入克(2005) 『叱らない教師、逃げる生徒 この先にニートが待っている』 扶桑社
- \* 吉川徹(2006) 『学歴と格差・不平等 成熟する日本型学歴社会』 東京大学出版会
- \* 小林よしのり(2006) 『中流絶滅(新ゴーマニズム宣言第15巻)』 小学館
- \* 小林由美(2006) 『超・格差社会アメリカの真実』 日経BP社
- \* 小島貴子(2005) 『我が子をニートから救う本 ニート或いはニートの予備軍の親たちへ』 すばる舎
- \* 小島貴子(2006) 『就職迷子の若者たち』 光文社
- \* 小日向未森(2005) 『ジャスト・ニート』 ノベル倶楽部
- \* 河野員博(2004) 『現代若者の就業行動』 学文社
- \* 小杉礼子(2002) 『自由の代償フリーター 現代若者の就業意識と行動』 労働政策研究・研修機構
- \* 小杉礼子(2003) 『フリーターという生き方』 勁草書房
- \* 小杉礼子編(2005) 『フリーターとニート』 勁草書房
- \* 小杉礼子・堀有喜衣編(2006) 『キャリア教育と就業支援 フリーター・ニート対策の国際比較』 勁草書房
- \* 工藤啓(2005) 『「ニート」支援マニュアル』 PHP 研究所
- \* 熊沢誠(2006) 『若者が働くとき 「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず』 ミネルヴァ書房
- \* 毎日新聞社会部編(2006) 『縦並び社会 貧富はこうして作られる』 毎日新聞社
- \* 松宮健一(2006) 『フリーター漂流』 旬報社
- \* 三浦展(2005) 『下流社会 新たな階層集団の出現』 光文社
- \* 宮島理(2006) 『現在がわかる! 格差社会 「格差」の実態がサクッとわかる!』 九天社
- \* 宮本みち子(2002) 『若者が《社会的弱者》に転落する』 洋泉社

- \* 牟田武生(2005)『だれにでも起きる！？ ニート・ひきこもりへの対応』教育出版
- \* 中野雅至(2005)『高学歴ノーマー』光文社
- \* 中野雅至(2006)『格差社会の結末 富裕層の傲慢・貧困層の怠慢』ソフトバンク・クリエイティブ株式会社
- \* 日本社会教育学会編(2006)『社会的排除と社会教育(日本の社会教育第50集)』東洋館出版社
- \* 小田晋・作田明責任編集(2005)『ニート・ひきこもり・PTSD・ストーカー』新書館
- \* 小方直幸(2006)『大学から職業への移行における新卒派遣のインパクト』『大学論集』第37集、広島大学高等教育研究開発センター、pp.61-77
- \* 李尚波(2006)『女子大学生の就職意識と行動』お茶の水書房
- \* 斎藤貴男(2004)『機会不平等』文藝春秋
- \* 斎藤貴男(2005)『教育格差と階層化(シリーズ「教育改革」を超えて5) 斎藤貴男対談集 自己教育する身体をとりもどそう』批評社
- \* 齊藤環(2005)『「負けた」教の信者たち ニート・ひきこもり社会論』中央公論新社
- \* 佐藤俊樹(2000)『不平等社会日本 さよなら総中流』中央公論新社
- \* 佐藤洋作・浅野由佳・NPO文化学宗教同ネットワーク編(2005)『コミュニティ・ベーカーリー 風のすみかによろこそ ニートから仕事の世界へ』ふきのとう書房
- \* 澤井繁男(2005)『「ニートな子」をもつ親へ贈る本』PHP 研究所
- \* 白川一郎(2005)『日本のニート・世界のフリーター』中央公論新社
- \* 失業者友の会編(1998)『失業天国 一生楽しんで遊んで暮らしたい人のお気楽本』光進社
- \* 杉田俊介(2005)『フリーターにとって「自由」とは何か』人文書院
- \* 橋木俊詔(2004)『脱フリーター社会 大人たちができること』東洋経済新報社
- \* 橋木俊詔(2006)『格差社会 何が問題なのか』岩波書店
- \* 橋木俊詔・浦川邦夫(2006)『日本の貧困研究』東京大学出版会
- \* タノック、スチュアート(大石徹訳)(2006)『使い捨てられる若者たち アメリカのフリーターと学生アルバイト』岩波書店
- \* てい〜ん(2005)『ニート脱出の投資戦略 バリューストックで億万長者へ』
- \* 鳥居徹也(2005)『フリーター・ニートになる前に読む本』三笠書房
- \* 山田昌弘(1999)『パラサイト・シングルの時代』筑摩書房

- \* 山田昌弘(2004)『パラサイト・シングルのゆくえ データで読み解く日本の家族』筑摩書房
- \* 山田昌弘(2004)『希望格差社会 「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房
- \* 山田昌弘(2006)『新平等社会 「希望格差」を超えて』文藝春秋
- \* 矢下茂雄(2006)『大卒無業 就職の壁を突破する本』文藝春秋
- \* 安川雅史著・多湖輝監修(2006)『「ひきこもり」と闘う親と子を応援する本 ニート・不登校は必ず解決できる!』中経出版
- \* 和田秀樹(2005)『ニート脱出 不安なままでもまずやれる事とは』扶桑社
- \* 渡部真編(2005)『モラトリアム青年肯定論(現代のエスプリ 460)』至文堂
- \* 渡部真(2006)『現代青少年の社会学』世界思想社
- \* 渡部昭男(2006)『格差問題と「教育の機会均等」 教育基本法「改正」をめぐる「隠された」争点』日本標準
- \* 『ポリティーク 2005 特集 現代日本のワーキング・プア』旬報社
- \* 『月刊高校教育 2005年6月号 特集 フリーター・ニート問題と高校生』学事出版
- \* 『月刊高校生活指導 2006年春季号 特集 ニート問題への提言』青木書店
- \* 『季刊 自治と分権 2004年秋 ワーキング・プアと社会保障・福祉』自治労連・地方自治問題研究機構
- \* 『教育運動誌 クレスコ 2005年9月号 「フリーター・ニート」問題への視座』大月書店
- \* 『ユリイカ 詩と批評 2006年2月号 特集 ニート』青土社

## **What does "career" mean for youth(vol.1) ?**

Kenshi YAMANOUCI(Associate Professor, IPHE, Kobe University)

The purpose of this paper is to examine what "career" or "career education" means for youth.

Now, we hear about "freeter" , "NEET" or "working-poor" frequently every day, but actually we don't know about them in detail. And we don't think these problems which is caused by these people as the problems of youth.

In this paper, I focus these problems mentioned above, especially one of youth.

This paper is an introduction of a series of articles written under this theme.